# 博士学位請求論文の概要及び審査結果の要旨

| | |
|---|---|
| 氏名 | 大方　美香 |
| 学位の種類 | 博士（教育学） |
| 学位番号 | 乙第４号 |
| 学位授与の要件 | 大阪総合保育大学学位規程第 13 条 |
| 学位授与の日付 | 平成 30 年 3 月 18 日 |
| 学位論文題目 | 乳児保育のカリキュラム編成の研究 |
| 論文審査委員 | 主査　玉置　哲淳　（大阪総合保育大学教授・博士（教育学）） |
| | 副査　山﨑　高哉　（大阪総合保育大学教授・博士（教育学）） |
| | 副査　鈴木みゆき　（国立青少年教育振興機構理事長・博士（医学） |

## 〔１〕論文の概要

本論文は、乳児保育（本論文では３歳未満児の保育を示す）の「保育内容のカリキュラム編成」について検討することを目的とする。「乳児保育は託児（子守り）である」、「乳児保育は必要悪である」といった乳児保育への歴史的認識が影響し、教育・保育学からの検討は不十分な状態である。しかし、児童福祉法の改正によって「保育に欠ける子」から「保育の必要な子」を対象とする時代に変化し、また、保育所保育指針の改定（2017）により乳児保育の質をどう確保するか、保育を教育の面から捉えるためにどうするかといった課題に直面するなど乳児保育の理論化が必要な時代となってきている。その理論化で最も焦点化する必要があるのは、乳児保育の「保育内容のカリキュラム編成」の課題である。本論文は、乳児保育の編成を考える際にどのような編成論を究明し、かつ、何をカリキュラム編成の原理とするのかを問い、これまでの知見を参照しつつ新たな内容編成の原理と方法を提案することを目的としている。

本論文の構成は、以下のとおりである。

序章　本研究の視座と課題
第１章　２つの「指針」が示す乳児保育の方向
補章　2017 年「指針」の乳児「保育の構造」

第２章　乳児保育の保育課程の検討　―保育課程編成の事例検討（調査１）―
第３章「乳児保育」大学テキストの分析―２つの指針の視点（調査２）―
第４章　乳児の保育内容編成の実際（調査３）
第５章　乳児の保育内容編成の原理ー融合保育の視点からー
終章　総括と結論
資　料

以下に各章の概要について述べる。

序章では、本研究の視座と課題について論じている。論者は、今日的な乳児保育の変化を整理し、乳児理解や発達理解において子どもを細分化しないで全体としての子どもをとらえる視座を提起している。また、2 つのタイプのカリキュラムの比較検討、その比較の中核に「ねらいと活動」の関係の整理があること、2 つのタイプを克服する乳児保育を提示することを課題として挙げている。乳児保育の内容研究を「実践構造」、「保育課程」「指導計画」などに分類して詳細な検討を加えた結果からは「乳児保育の構造」を明らかにする視点を持ちえなかったとの方向性を見出している。さらに、「情動論」や「基本的生活習慣論」を検討して乳児保育研究の深化に必ずしもつながらなかったと指摘している。

第１章では、まず「保育所保育指針」における保育内容編成の構造を検討している。本論文では、1965 年保育所保育指針と 2008 年保育所保育指針を比較した。比較内容は、保育内容の編成の原理および「子ども理解、目標・ねらい、内容（活動）、保育者の働きかけ、評価」の５点である。その結果、前者は望ましい活動に焦点をあてて「活動の選択・配列」を行う「活動重視の立場」(以下、Ｘ活動重視タイプ)と特徴づけられ、さらに「単純活動タイプ」(Ｘ―1)と「望ましい活動タイプ」(Ｘ―2)に分けられることがわかった。また、後者は教育及び教育のねらいを重視する「ねらい重視の立場」(以下、Ｙねらい重視タイプ）と特徴づけられ、さらに「ねらい重視タイプ」(Ｙ―1)と「主体重視タイプ」(Ｙ―2)に分けられることがわかった。また、この原理は、目標・ねらいだけではなく・その他の 4 つの編成に影響を与えていることがわかった。例えば、乳児において「生活習慣の行動」に焦点をあてて保育内容を編成しているＸ活動重視タイプは、「子どもの望ましい活動」から保育内容を選択・配列することが保育内容の編成の主たる方向であるとしている。一方、Ｙねらい重視タイプは「子どもの主体的活動」から領域別に「心情・意欲・態度」を育てようとしている。結果として、Ｙねらい重視タイプは乳児の場合にも、「養護と教育（5 領域)」などの領域ごとにねらいを抽出しようとし、3 歳児以上の保育・教育の編成原理に近づくような乳児保育が実践されていると評価することが可能であることが明らかになった。

第２章では、乳児保育の保育内容の骨格である保育課程を検討した。そのため、上記の 2 つの保育所保育指針から抽出された 2 つのタイプを「保育課程の事例」から明らかにしている（調査１)。このため、保育内容の編成の原理を念頭におき、「子ども理解、目標・

ねらい、内容（活動)、保育者の働きかけ、評価」の５項目から検討した。その結果、次の傾向が見られた。①Ｘ活動重視タイプは、保育所における保育内容についての全体計画であり、望ましい内容（活動）を年齢に応じて一貫性をもって指導する。②Ｙねらい重視タイプは保育課程を上位に位置づけ、計画性をもって保育を展開する。質の向上を目指すことが重要としている。③Ｘ活動重視タイプは暦年齢区分を採用し、子どもは、発達段階に応じて諸能力（特に外的行動）を調和的に発達させることに重点をおいており、必要な諸活動が適切に選択・配列されることを目指している。④Ｙねらい重視タイプは暦年齢区分ではなく８つの発達過程区分となり、「おおむね６カ月未満」という表記となっている。「内容」は「ねらい」を達成するためにあり、子どもの生活や実態に応じて「保育士等が適切に行う事項」と保育士等が援助して「子どもが環境に関わって経験する事項」を示している。⑤Ｘ活動重視タイプは「保育内容の区分、年齢の区分、望ましい活動の選択、望ましい活動の配列、全体としての一貫性、保育計画の作成」という編成である。こどもが現在を最も良く生き、望ましい未来を創り出す力の基礎を培うことが保育の目標とされている（7つの目標)。⑥Ｙねらい重視タイプは、「保育理念、保育方針、保育目標、発達過程に基づいた各年齢の全体計画、各年齢のねらい・内容は一貫性をもって組織、保育課程の編成」である。理念や方針に応じた保育目標を保育全体の方向性として整理しようとしている。この目標は保育所が目指すものとされている（６つの目標)。⑦Ｘ活動重視タイプは、年齢区分により子どもの活動を領域（6領域）に分けて内容を考える場合と望ましい活動として生活・遊びを具体化（生活習慣、遊び等）して区分している場合がある。⑧Ｙねらい重視タイプは「ねらい」と「内容」で構成される「養護」と「教育」である。年齢区分はなく、「養護」は生命の保持と情緒の安定、「教育」は５領域で示した。以上、乳児の実践構造を考えるときには、1）ねらいは年齢別に変える必要があるのか、2）そのねらいは領域別に出すのか、3）もし領域があるとすればその領域はどのようなものか、などを検討する必要があることが提起された。論者は、上記を踏まえ２つのタイプを生かした融合した保育内容編成を目指すことが出来ないかを検討課題として明らかにした。

第３章では、以上のことをふまえ、「乳児保育の大学テキスト」（35事例）において２つのタイプをどのように採用し・採用していないかを検討した（調査２)。テキストに記載されている指導計画はどのようなタイプであるかを先の５つの基準から検討した。テキストに掲載されていた「乳児保育」の年間指導計画は、第１位Ｙねらい重視タイプ56%、Ｘ活動重視タイプ32%、その他12%であった。月間指導計画は、第１位Ｘ－1タイプ57%、Ｙねらい重視タイプ31%、その他12%であった。週案は、第１位Ｘ活動重視タイプ46%、Ｙねらい重視タイプ45%、その他９%であった。以上のことから、Ｘ･Ｙ２つのタイプが使われていることがわかった。一方、指導計画編成では必ずしも「一貫」したタイプばかりではなくねらい重視から活動重視（あるいは逆）の「転換」が行われていることがわかった。乳児保育の保育内容編成の枠組みは曖昧であり、ねらいと内容の統合的理解の仕方、及び、子どもの活動の理解の仕方に課題があることが明らかになった。

第４章では、「乳児保育の現場（412 名の保育者から回答）は反映された保育内容の編成がどのように行われているのか」を検証するため「調査３」を行った。「乳児保育」の年間指導計画の「ねらい」は、第１位Ｙねらい重視タイプ（子どもの実態 90%）、第２位Ｘ活動重視タイプ（保育内容 66%、活動と関係 61%、活動 62%）であった。月間指導計画の「ねらい」は、第１位Ｙねらい重視タイプ（子どもの実態 88%）、第２位Ｘ活動重視タイプ(保育内容 63%、活動と関係 54%、活動 71%)であった。以上のことから、Ｘ･Ｙという２つのタイプが「ねらい」編成に使われていることがわかった。しかしながら、領域の視点（心情・意欲・態度 61%、5 領域 64%、養護と教育 70%)が「ねらい」となっている保育内容編成も相当数あった。調査１で指摘した乳児保育の保育内容編成の枠組みの曖昧さ、ねらいと内容の統合的理解の仕方、及び、子どもの活動の理解の仕方に課題があることは調査３からも明らかになった。論者は、Ｘ･Ｙという２つのタイプは各々意味があると考え、むしろ、その統合・融合を検討する視点を維持することを提起している。

そこで、第５章では、新たな「乳児保育の保育内容編成」として「相補型生活活動」の概念を提案し、その指導計画編成の方向を示している。相補的生活活動というのは、乳児保育にあっては「子どもの活動には保育者の関与が必要である」ことを前提とし、そこに子どもと大人の相補う関係を取り出そうとしている。例えば、「物をつかむ」いう原初的な活動の場合、最初、「子どもが握れる範囲に物がなければ、つかむ行為そのものがなくなる」大人と子どもの関係がある。やがて大人が「がらがらを振る」という行為だけで子どもの注視を促し、大人のこうした補いがあれば、子どもは「物をつかむ」という行為が成立するようになる。これを相補的な関係とよび、乳児保育の土台として位置づけている。こうした生活・遊びの活動への適応行動（生活適応活動）における相補的関係が乳児保育の土台となることを提起している。その上で、活動の領域を想定するのか、発達の領域を想定するのかという編成論を検討した。すなわち、子どもの成長をどのような視点や内容からとらえるのか、「子どもの活動からか領域からか」という課題について検討した。保育者が楽しさなどの子どもの「内的活動」に視点をおいた時「ねらいと活動」の両方が統合可能となると考えた。

本研究の結論は、Ｘ活動重視タイプとＹねらい重視タイプを融合した子どもの活動と保育者の働きかけに視点をおき、「生活適応活動（遊び)」を土台とした保育課程の編成を提案する。乳児の発達はゆるやかに生活適応活動のなかで育つものであり、子どもの立場に立ったしなやかな指導計画編成を、「相補的生活活動」として提案を行う。児童中心主義と系統主義の保育の考え方の違いともいえるが、「育てると育ちの融合」という視点から具体的な指導計画論を通して明らかにした。

今後の課題として、実践上のプラン形成の事例検討などを深める必要があるし、さらに、家庭保育への支援の土台として本論文の提起している方向の有効性を検討していく必要があると考えられる。また、保育者が乳児保育に対する理解、すなわち子ども理解を深める一石となることを願う。さらに、今後は保育学、乳幼児教育への真摯な取り組みと実践研究をさらに継続し、少しでも貢献できるように願い試金石となることを課題としてあげている。

〔２〕審査結果の要旨

本学大学院児童保育研究科学位（論文博士）審査規則は第12条において次の5つの審査基準を公表している。

（１）当該博士学位申請論文が、当該申請者の研究業績を踏まえ、その集大成として認められる内容であること、

（２）当該博士学位申請論文の属する研究領域において、独創性が認められること

（３）当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであると認められること

（４）当該博士学位申請論文に、他の領域を含む学際性が認められること

（５）本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであること。

まず、（１）当該博士学位申請論文が、当該申請者研究業績を踏まえ、その集大成として認められる内容であることについて。

本論文は、筆者が関心を持ってきた保育内容研究と乳児保育研究を結合したものである。すなわち、初出は以下のとおりである。

第１章

「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討ー乳児保育研究その１ー」　大方美香・小寺玲音／玉置哲淳　大阪総合保育大学紀要　第７号（査読なし）

第２章

「第２章　乳児保育の保育課程の検討―保育課程編成の事例検討ー（「乳児保育計画論ー２つのタイプの事例を比較してー」（2013）　大阪総合保育大学総合保育研究所　乳児保育プロジェクト（代表　大方美香）ふくろう出版　所収（査読なし）

第３章「乳児保育」大学テキストの分析―２つの指針の視点（調査２）―　「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討ー乳児保育研究その２ー」　大阪総合保育大学紀要　第 10 号　（査読あり）

第４章

「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討ー乳児保育研究その３ー」　大阪総合保育大学紀要　第 11 号　（査読あり）

なお、序章・補章・第 5 章及び終章は上記の研究を発展させて新たに執筆したものである。

このように筆者の保育内容と乳児研究の整理したものである。当該申請者研究業績を踏まえ、乳児保育、特にカリキュラム編成に視点を当てた研究の集大成として認められる内容であると評価できる。

（２）当該博士学位申請論文の属する研究領域において、独創性が認められることについてである。そもそも、乳児保育の研究は本論文でも指摘されているように心理学・医学の立場からの研究はある程度の集積があるが、教育学・保育学の研究は殆どない。特に、保育内容編成の研究は皆無に近い。その中で、方法論に整理すべき課題はあるけれどもカリキュラム編成を主題にして、しかも、具体的な事例検討を踏まえた提案を行っており、そのオリジナリティ・独創性は高いと評価できる。

特に、指導計画編成の手続きや方法から 1965 年と 2008 年の保育所保育指針を典型としてとりあげ、前者をＸ、後者をＹとして２つのタイプを抽出し、本論文の分析カテゴリーとした。２つのタイプはスコープとして活動の領域を想定するのか、発達の領域を想定するのかを軸として、編成の基本要素を提起し、乳児保育の指導計画編成の軸として、「子ども理解、ねらい・目標、内容の編成、保育者の働きかけ、評価」の５つの基準を提案した。この提案にのっとり「保育課程」の事例検討（調査１）を行い２つのタイプの特質を検討している。

さらに、この２つのタイプが乳児保育の保育者養成大学で使われている「乳児保育」のテキスト分析（調査２）を行い、その中で「年間指導計画・月間指導計画・週案」の３つを対象に前述した５つの基準を用いて検討した結果、乳児保育内容編成には２つの方向が明白にあることを整理している。その中心の課題として、「ねらい」と「内容」の関係をどのように理解するかによって指導計画が異なることが明らかとなった。さらに、それを受けて保育者がどのように編成を行っているかのアンケート調査（調査３）を行い検討した。結果として、ねらい重視型（Y）が全体で多い傾向がみられ、短期になるほど活動重視型（Y）が多くなる傾向が明らかとなった。

以上の分析はこれまで殆ど手がつけられなかった考察であり独創性が高いと評価できる。論者は、さらにこれらを踏まえて、２つのタイプの融合を目指す保育を提案している。すなわち、子どもの活動と保育者の働きかけに視点をおき、「生活適応活動（遊び）」を土台とした保育内容編成の方向を模索している。その基本は、乳児の発達はゆるやかに生活適応活動のなかで育つものであり、子どもの立場に立ったしなやかな指導計画編成を、「相補的生活活動」として提案を行っている。児童中心主義と系統主義の保育の考え方の違いとも言えるが、「育てると育ちの融合」という視点から具体的な指導計画論を通して明らかにする。また本論文では、乳児保育の原理として「相補的生活活動」の概念を提案する。すなわち、乳児保育は子どもの活動には保育者の関与が前提であるが、子どもの活動は保育者との関係に規定され、又、保育者の関係は子どもの活動なしには成立しないという相補的関係が存在しているということである。本論文では、これを「相補的関係」とよび、乳児保育の土台として位置づけている。この「相補的関係」こそ、子どもの関係性の発展・発達にそのまま繋がるものであり、本論文では、相補的関係を４つのタイプ「分離的自主性」「対等な共同性」「サポートされる関係」「一体的包摂」として区分した。これらはこれからの乳児保育研究の土台となるものと考えられ独創性が高いと評価できる。

（3）の「当該博士学位申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであると認められること」について。前項でも述べたように、本論文は乳児保育のカリキュラム研究、ひいては、保育学の研究の礎となる可能性をはらむものと思われ、保育学・カリキュラム研究に一石を投じたものと評価できる。

（4）「当該博士学位申請論文に、他の領域を含む学際性が認められること」では、本論文は保育の視座から教育学の土台を改めて問う論文となっており、新たな保育観の検討を通して教育学はむろんのこと乳児に関わる心理学・医学にも問題提起する内実をはらんでおり学際性が認められる。

最後に、（5）本学大学院が授与する博士の学位にふさわしいと認められるものであること」についてでは、本論文が提起している内実は本学の保育を軸とした乳幼児教育の研究の土台そのものであり、本学が求める論文と評価できる。

以上のように、本論文は高く評価すべき独創性を備えていると認められるが、博士学位請求公開審査会において 3 人の論文審査委員により出された質問や問題点について主なものを記すこととする。

①学校・幼児教育とは異なる乳児保育の独自性とは何か　②カリキュラム編成におけるねらいと活動のねじれについてどう理解し解決するか　③提案している相補的生活活動とは何か　④論文のオリジナリティはどこにあるか　⑤2 つのタイプの融合をいっているが具体化する上での課題は何か　⑥論文構成に反復を整理したほうがよい、⑦新指針の 3 つの柱と本論文の関係について　⑧相補的関係における保育者の資質について　などについて指摘と質問があった。

論文審査委員による上記の本質的な指摘と質問に対し筆者の丁寧で的確な回答が寄せられるとともに、問題点のいくつかは今後の課題として認めその解決に向っていくとの回答がなされた。最後に、乳児保育の編成の今後の研究の方向が示された。

よって、本論文は論文博士（教育学）学位（乙種）を授与するにふさわしいものと認めた。